

潮流

潮流◆題字奥野誠亮

和歌山大学学長

山本健慈氏に聞く①

自立した生き方形成を支援

——和歌山大学が学生に対して発しているメッセージはどういうものですか。

本学は「生涯、あなたの人生を応援します」というメッセージを発しています。入学生や卒業生を応援するのは当たり前のことですが、在学中の教育・支援においては、高等教育を受けた専門家としてだけでなく、人間として自立した生き方を形成していくことをポイントにしています。ですから、教養教育のことを本学では「人間になるための教育」と位置付けました。この視

生涯、あなたの人生を応援

入学生や卒業生の応援だけでなく
人間として自立した生き方が
できる学生にしたい、という。
大学のミッションを全教職員が
共有している。

点から自然認識、社会認識、自己認識を培うように既存の科目を統合しています。また、卒業後の人生においては、いろいろな挫折も経験するでしょう。そんな時、大学や同窓会が応援する、という意味も込めています。

さらに、学生が大学に入学するまでの約18年間の「過去の人生」も応援したいという気持ちを含めています。人間としての成長の積み残しをしている部分があり、入学後にさまざまなトラブルを生んでいます。例えば、決められた勉強はできるが、自分から進んで何かをやる経験が乏しいなど、大学

生に限らず日本の青年の多くが自立の意識が低く、自己肯定感を持っていない状況にあります。こういった状況に対して、大学も本気になって誠実に対応していく心構えを持つ必要があると思っています。こうした心構えを大学としてしっかりと持つことを社会に対しても宣言した上で、そのための仕組みや方法・技術の開発なども含めて検討していく必要があります。

——大学としての姿勢を明確にすることに力を入れていますね。

大学としての姿勢を、学生の保護者だけでなく、学生が学んできた小・中・高校の先生方にも知ってもらうための情報発信が必要と考えています。大学改革の動きが盛んですが、今ある問題に丁寧に対応することが、大学入試の制度改革よりも大切ではないかと考えています。とにかく受け入れた学生をしっかりと育てることが大学の使命であり、教職員の最も重要な仕事であるということなんです。ただ、大学入学までの約18年間に抱えてきた問題は、学生一人ひとり、皆、違います。総じて、大人が敷いたレールの上で疑問も持たずに、また自主性を発揮することなく、一つの数量的な尺度で測れるような課題をクリアすることに集中してきた人生を送ってきています。昔に比べて人間としての精神的な強さがないとか言いますが、それは彼らに責任があるわ



和歌山大学学長

山本健慈

やまもと・けんじ◎1948（昭和23）年生まれ。山口県出身。京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。1977年に和歌山大学に着任し、1995年から同大学教育学部教授。同大学生涯学習教育センター長、副学長、サテライト部長などを経て2009年8月から和歌山大学学長。1988年以来「大人が育つ保育園」といわれるアトム共同福祉会保育園に関与。

けではなく、彼らを育てた時代と社会、それをつくった私たち大人世代の責任です。

保護者の不安にも応える

——精神的な強さに課題があることを教職員はどう見えていますか。

もちろん、教職員もそういう学生のひ弱な面に気付いています。ですから、学生を学内ではなく現場（フィールド）に連れて行く、あるいはアクティブラーニング（学生参加型の学習）など、学びの環境や方法を工夫することで、いろいろな人と関わる機会を提供しています。例えば、語学担当

教員は、入学間もない1年生に、クラスに溶け込めない学生が出ないよう、とてもきめ細かく対応しています。ところが、こうした学生の情報、個々の教員の工夫が教員同士では共有できていません。

本学でカウンター業務をしている10人の事務職員と懇談する機会をつくりました。その全員が学生の保護者から「子どもが登校を渋っている。友達をつくってやって」などの要望を受けた経験がありました。「ヘリコプター・ペアレント」（上空を旋回するヘリコプターのように、いつも自分の子どものそばにいて、問題があれば駆け付け

る過保護な親のこと）という表現がありますが、過干渉と思える状況は現実にあります。しかし、その懇談の中で、学生支援業務の幹部が「親が学生について不安を持つ時代状況と、その親の人生を理解して対応しよう」とコメントしたのは、「生涯応援します」という標語が共有されてきた結果でしょう。

——大学のミッションの明確化が求められています。

大学はサービス産業ではありません。学生が入学するまでの人生で、十分に育っていない部分にも目を向けて、彼ら自身が自分の問題として自覚し、大学でのさまざまな活動を通して「一人前」として成長できるようにすることが大学の最大のミッションではないかと考えています。

卒業して社会に出て行く学生にとって、大学は最後の問題解決の場です。大学の教職員は、学生や保護者とトラブルを起こすことを恐れて全てを受け入れる対応をするのではなく、学生の育ちの課題を保護者にも提起し、親の在り方も支援する、そして、今、大学はこうしたことにも自覚的に取り組んでいるということを発信し、同時にこの現状への警鐘を社会に告げていくことが求められています。

——「行動宣言」を出されていますね。

国立大学法人は2004年度以降、国立

大学法人法第30条・31条により、文部科学大臣が定める6年間の中期目標に基づき、中期計画及び年度計画を策定することが義務付けられています。学長に就任した2009年8月に、2010年4月からの第2期中期目標の「前文」(大学の基本的目標)で任期中の大学運営の基本姿勢を表現しました。加えて本学の理念を打ち出す「和歌山大学憲章」を教職員・学生参加で定めようとしたのですが、やめました。それは、高等教育をめぐる社会的状況は極めて流動的ですから、理念的な議論にエネルギーを割くより、第2期中期目標・中期計画を達成することで「どのような大学になるのか、どのように社会への貢献ができるのかのイメージ」を明らかにすることが大切と考えたからです。そこで、2011年1月に、2013年までの3年間で本学が達成を目指す七つの重点課題を設定した「2011～2013行動宣言」を出しました。

この中で特に、学生をどう育てるのか、どう教育するのかという方針を明確にしました。学生の育ちや課題については、共通するパターンが見られます。ですから、全教職員が、同じ志と姿勢を持つて学生の教育に当たることが大切です。ただ、その方法については、多様であるべきでしょう。大きな規模の大学ではなかなか難しく、本学の規模だから対応できるわけでは

改革への決意とゴールを明示

——七つの重点課題はどのような内容でしょうか。

七つの重点課題とは、①時代と社会が求める深い教養と、他者とともに問題解決に取り組みることのできる実践力をもつ人間を育てます②学生の学習、研究を支援する図書館を目指します③和歌山の地域と世界にとって不可欠な農・林にかかわる地域創造支援事業に取り組みます④中学生・高校生が憧れと入学への希望をもてる大学にします⑤同窓会等と連携し学生・卒業生の生涯を支援します⑥大学構成員のやる気を高め、持続的に自己改革する組織をつくります⑦次の時代の大学経営を担う人材を養成します⑧というものです。この宣言は、リーフレットなどで広く配布しました。改革への意欲と決意、そしてそのゴールを分かりやすく伝えるものとして、学内外の多くの方から共感を得られました。

2013年5月には、第2期の後半期に対応した「2013～2015行動宣言」で八つの重点課題を設定しました。ここでは、「国立大学のミッションの再定義」を踏まえて次代を担う人材の養成のほか、地域貢献や地域創造支援事業などに取り組む視点から、観光学研究の中心拠点構築や防災・災害時支援等に関する教育・研究プロ

ジェクトに取り組むことを掲げています。こうした行動宣言を踏まえ、観光学研究・教育の拠点形成については、多くの大学に広がっている観光系学部を支えるため関西観光教育コンソーシアム設立の中心を担っています。幸い文科省や関連業界とも本学を日本の観光学研究の拠点にしようという合意が形成され、2014年4月の観光学研究科博士課程の設置が具体化しつつあります。また、紀伊半島における防災・減災に和歌山大学としてどう対応するかについての方針作成のため、世界的に活躍する研究者による有識者会議などを設置しています。

——「行動宣言」を踏まえて、「和歌山大学物語」という大学の指針を端的に示した資料も作成されました。

この「行動宣言」における諸課題を総合化、構造化したものが「和歌山大学物語」で、2012年4月に作成しました。学生が入学し、4年間主体的に学ぶことで、日本と世界を支える人材として育っていく過程とそれを支援する組織・大学・教職員の役割を明示したものです。「これからの時代に果敢にチャレンジできる学生を育てます」というキャッチフレーズで、▽和歌山というフィールド(地域)で鍛える▽世界(異文化)で鍛える▽図書館で鍛える——などをコンセプトとしています。

和歌山大学 = <http://www.wakayama-u.ac.jp/>